

---

# 女になった男

明

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女になった男

### 【著者名】

明

### 【あらすじ】

ある朝起きたら女になっていた！笑タイトルそのままの小説です（＾＾；）（元）男性は女性になつてどのように生活し生きていくのか？読みやすく分かりやすく書き表していきたいと思います。

## あじがき（前書き）

感想などありましたら、ただけると光栄です (\*^-^\*)

## すじがき

人の概念としてヒトは男性と女性に分けられている。  
男性は女性に興味があり女性は男性に興味がある。  
それは好奇心、または性的欲求であると思う。  
では例として男性がいきなり女性になつたらどうなることだらう?  
それとは逆の場合はどうなることか。  
そんなことを小説として書き表していきたいと思う。

## ～始まつ～（前書き）

ここから本文開始です。もしよろしければ感想を下さい。それでは  
どうぞ。（^\_-^）。

## ～始まり～

生きてるのに疲れた。いや正確には疲れているわけではなく刺激のない生活にうきだりしていたのかもしれない。

何事もなく過ぎていく日々。

平和そのもの。どうしたことだらう。

世界には食糧難や戦争の恐怖が渦巻く国さえあるといつのに。

しかし今の俺はその恐怖がひどく魅力的に見えた。

明日が見えない恐怖。生きてることそのものが奇跡のよくな世界。

そんなものを望んでいたと思う。

そんな中でふと考え込む時があった。

もし俺が女としてこの世に生まれていたらどうなっていたのだろう？

ひどく興味をかき立てられた。

どうなっているのか想像だにつかない。

面白そうだとthought。昨日までは・・・。

「薰～！ご飯できたわよ～！」

と母の呼ぶ声とともに起きる。

俺の名前は吉田

薰。

日本の高校に通う単なる一般ピーポーだ。

成績はふつう。特に特技とかがあるわけではない。

年は17歳。彼女なし。酒・たばこは×。

友人が多いわけでもない。自己紹介はこれくらいにしておこう。

俺は母に起こされ階段を下りていった。

なぜか起きたあがつた時から少々頭が重い気がする。

まず目を覚ますため洗面所に向かうことにした。2～3回顔を水で洗う。

なんか髪がうざつたく感じた。

そしてタオルで顔を拭きふうとため息をつきながら鏡を見た。

その瞬間、俺は絶句した。

俺の顔が変わってる。鏡に映った顔はいつも俺の顔ではない。男の顔ではなく女になっていた。

自分の顔に触れてみる。やはりいつもの顔ではない。それに髪がセミロングくらいまでのびていた。

毛先が水で軽く濡れている。

慌てて全身を確認した。違う。やはりいつものままではなかつた。胸に膨らみができる、男にあるべきものもなかつた。どうしたことか。昨日寝る前まではふつうの男としての体だつたはずだ。

これは夢だと思い古じがほっぺをつねつてみた。

痛い。夢ではない。これからどうしよう。俺の体は一体どうしたんだろう。

そんなことばかり頭をよぎつた。

洗面所で躊躇ついていても仕方がないので母に協力を仰ぐことにした。

「母さん、ちょっと話が……。」

と言つて茶の間へ行くと母が朝食をとつていた。

「やつと起きたわね。さあ朝ご飯食べ……？」

「あんた誰！？」

即答。ちょっとへこんだ。

「薰だよ！見てわかるでしょ！？自分の息子でしうが！」

と俺もとい私（？）がいうと

「薰？うちの薰は男ですよ！つたく薰もすみにおけないわねえ。いつの間に女の子つれてあがつたんだか。」母はそういった。

「だから俺が薰だつての！」

思わず叫んだ。

母はびっくりした様子で田を見開いた。

「だからひつりの薰は男……。」

といつたので

「じゃあ部屋見てきなよ。誰もいないから。そうすれば信じられる

でしょ？」

と俺がいつと

「確かにその通りだわねえ。玄関に靴も私と薰の分しかなかつたし。

「

といつて俺の部屋にあがつていった。

数分後母が青ざめて帰つてきた。

「ホントにあなた薰？」

と聞いてきたので

「そうだつて。なんかわからんいけど起きたらこんなになつてた。

「

母は

「どうなつてゐるの？」

といつた。

こつちが聞きたいよ、全く。

「全く理解できない状況なんだ。一体どうなつてゐるのか。朝起きたらこんな風になつてた。それだけだよ。」

沈黙が続いた。

～買い物 1～（前書き）

感想等お待ちしております m( 一一 ) m

そしてその後の身の振り方を考えた。

一体どうしたらいいものか。ふつうならもう少し慌てた素振りをみせてもいいようなものだ。

いきなり朝になつて起きたら女になつていたなんて誰も信じない。俺自身まだ状況をつかめていない。

とりあえず今日は学校に休むと報告し事態の把握につとめることにした。母も今日は仕事を休むらしい。

朝食をとりおわったあと散々質問攻めにされた。

趣味やなんかの俺しか知らないであろうことを聞かれたので面倒だと思いながらも一つ一つ答えていった。

母ももはや信じるしかなくなつたようで頭を抱えていた。さてどうするか？病院にでも行つて検査するか？元に戻る方法があるのか探してみるか？

それともほかに方法はないか考えていた。さてどうしたものか？と考えていたが次第に

「もうどうしようもない」

とこう考へが頭をよぎつた。

日常生活においてこの体でもさほど問題はないのではないか？  
そういう方向に考え始めた。

ここで考えていても仕方がないのだから。

こんなプラス思考で考えれる自分がいるなど信じられなかつた。とにかく前向きにと思つた。

するといきなり母が

「ねえあんた服ダボダボだよ？もう今の服は着れないんじゃないかい？」  
と言つた。

今更だが今の体は女性である。

身長や体型などもかなり違っていた。

俺自身気付いていなかつた。

さてどうしようか。

そう考え始めたときまた母が

「服、一・一着買っておいたほうがいいのかもねえ」

と言つた。

俺は

「確かに。今の俺の服はマトモに着れないようだし」「と同意した。

自分が女性の服を着る。今まで想像だにしなかつた。いや考えるほうがあかしいんだけどさ。

とにかく母と買い物に行くしかないよつだ。

あいにくマトモな服がなかつたのでジャージを着ていくことにした。それが一番マトモに見える。

デパートにジャージ?とも思つたがダボダボの男物を着ていくよりマシだ。

もうそろそろ店の開く時間だ。早々と支度をすませ家を出た。

ある程度覚悟はしていたが周りの視線が痛いほど自分を見てるのがわかつた。

俺を見てコソコソ話してる奴さえいる始末。

あ~そんなに珍しいのか。まあ当然のことだけど。

などと考えつつ気がつくと洋服売場まで来ていた。

早々と店員が出てきて爽やかな営業スマイルで

「いらっしゃいませ! 今日はどの様なご用件でしょつか?」

と聞いてきたため

「いや、お・じやない私の背格好に合つ服がほしいのですが」と答えたため店員が少々驚いた顔で

「はいわかりました。ではこちらへどうぞ」

と言われ奥へ。

こんなところに来たことは無いため俺は少し緊張していた。

すると店員が

「服のサイズは何センチくらいですか？」

と聞いてきたため素で

「わかりません」

と即答してしまった。

店員はすぐに

「はっ？」

とだけ言った。

そして言つてからすぐ焦つた。まずい、これはひっじょーにまずい事態だ。

普通自分のサイズがわからない奴はいない。

せいぜいいたとしても小さな子供くらいのものだ。

辺りに不穏な空気が漂つていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1772a/>

---

女になった男

2010年10月27日02時40分発行